

野間岳は、南さつま市^{かささき}笠沙町の西端、東シナ海へ向けて嘴のように突き出た岬の上に、ひときわ抜きん出て君臨する山である。整った三角錐の特徴ある姿は、山麓の集落の至る処から、北の吹上浜からも串木野からも、遙か甌島からも望む事が出来る。古来から航海の目印にされていたとされ、その名は、航海神「媽祖」^{まそ}を娘媽^{ろうま}と呼ぶ事から、それが転訛して野間となったとも言われる。頂上からは東シナ海が一望できるが、遙々大海を渡ってきた舟が初めて日本本土として認識するのも、野間岳だったと言われている。かの鑑真和尚が漂着したのは南隣の坊津町^{ぼうのつ}秋目の地であるが、もしその目がまだ見えていたならば、野間岳を望見したであろう。

『三国名所図絵』は、野間岳をこう表現している。

「笠沙御崎といえる地嘴、長く海中に尖り立つ。此岳其御崎に屹立して、孤高なり。北の一面陸地に接して、其余の三方は、大海に臨む。故に岳形南北に長し。西海道の極尽にして、実に本藩の名山なり。山麓より絶頂まで、登路一里余、岳の八分までは、漸々高くして形状頗る寛緩なり。茅草の類生え茂りて樹なし。八分以上は、怪岩巨石多し。岳形頓に急峻にして、人肩の上に頭首あるに似たり。材木鬱然として、翠色雲に浮かぶ。故に峰頂に登るには、岩石を攀りて僅かに至るべし。かかる巍然たる孤岳なれば、毎歳漢土の商舶、長崎に来る時は、洋中にて必ず此岳を認て、針路を取り、皇国の地に到り。その始て認め見し時は、酒を酌て賀をなすといふ。凡高山は多く火起りて焚ることありといへども、此岳古来火起これることなし。」

野間岳はまた、『古事記』や『日本書紀』にも記載され、神話の世界にも登場する。皇孫^{にぎのみこと}邇邇藝命は高千穂霧島山に天振りしたが、当ても霧島山は盛んに噴煙を上げていた。

「奇石降り荒茫たる不毛の地、皇都を定むべき土地にあらず、為し行ひて吾田長屋笠狭碕に到り、長屋の竹島に登りて土地を巡視し給ふ」

この竹島(嶽島)が野間岳であるといわれている。この後、尊は地元の「木花之佐久夜毘賣」^{このはなのさくやひめ}を娶り、三人の皇子をもうけた。「海幸彦、山幸彦」はその皇子達で、それぞれ海の漁、山野の狩が得意であった。兄に無理強いして得意技を交換して、釣具を借りた山幸彦が漁に失敗して途方に暮れた海岸が、仁王碕であるという。仁王の名も二皇の意とされている。

野間岳の八合目にある野間神社は、邇邇藝命、木花之佐久夜毘賣、火照命^{ほでりのみこと}(海幸彦)、火須勢理命^{ほすせりのみこと}、火遠理命^{ほおりのみこと}(山幸彦)の五柱を祭神として、今なお地元の尊崇が厚い。

中でも、「木の花の咲くや姫」は、古来日本一の美人とされ、地元の誉れとして親しまれている。

野間岳は、小浦のエベスの鼻、大当、山野、野間池の岬の鼻等、四囲どこから見ても気品があり美しい姿である。海上を巡り眺めても、見飽きない程個性的である。地元では、タケ、ノマンダケ、ノマンタケドン等と呼び、昔から男も女もその頂に登るが、それをタケメイという。初めて登ることはハツメイといい、その後は当人の家に親類が集って鶏を

つぶし、ソーメンやニシメを拵え、酒宴（サカムカエ）をする。

笠沙町の集落の多くは互いに寄り添いながら、至る処に石垣を巡らし、急峻な地形に張り付くように生活圏を確保しているが、東シナ海が育んだ新鮮な魚、中世より受け継がれてきた焼酎、そして天孫降臨の神話等が今なお生き生きと人々の心を豊かにしている。そんな暮らしの中心にあるのが、野間岳に他ならない。

野間岳へは、野間神社から出発して、照葉樹林の中、岩がちの路を辿るが、要所には、丸木段、手すり、鎖等も設置されているので不安はない。10分程で海が望め、植物園や第一、第二展望所等を経て、40分程で頂上に達する。灌木に囲まれほっこり開けた地に一等三角点標石がある。展望は西側の梵字の書かれた岩上に立つと得られる。好天ならば、遙か洋上の島々や、桜島、開聞岳等が望める。遙々訪れた感動がこみ上げてくる事だろう。



二万五千図：野間岳・片浦

交通機関：鹿児島中央駅より鹿児島交通バス。加世田（乗換）～野間池行、椎木下車（約3時間）以下車又は徒歩。

歩程：野間神社から植物園、第一、第二展望所を経て40分で頂上

問い合わせ先：南さつま市笠沙支所 0993-63-1111

最寄りの温泉：近くにはない。